創世記 18 章 1-15 節
「笑いと約束」

今日の聖書は、子どもをずっと望んでいたアブラハム夫妻に、来年の今ごろあなた方の間に男の子が生まれる、という約束がなされる場面です。とっても嬉しいはずなのに、サラの笑いが起こるのです。でも、この笑いは笑顔の笑いではなく、冷笑、苦笑ともいえる笑いでした。この時アブラハムは99歳、妻サラは89歳。アブラハムたちは、マムレの樫の木のふもとで暮らしています。そこに、3人の旅人・主がやってきます。10 節で、主はアブラハムに語りつつ、サラに聞こえるように、「来年の今ごろ、男の子が生まれる」と語られます。突然何を言い出すのか、と思ったでしょう。11 節で、サラが子どもを産める状態にないことをしっかりと記しています。年齢や健康が整わなくなって、自分でも、自分の可能性に対して諦めてしまいたくなる。「不可能」という言葉が見えて来た時、実はまさにそこからが神の働く領域なのだという、この聖書の逆説を私たちは知らなければなりません。

サラは、この知らせを聞いた時に、12節「サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。」とあります。これが、サラの反応でした。不可能だと考えたのです。けれども、神はずっと子を与えると約束し続けてこられたのです。しかしサラは、その知らせを受け止めることが出来ませんでした。続けて主は 13 – 14 節のように伝えています。「なぜサラは笑ったのか。…主に不可能なことがあろうか。来年の今ごろ、私はここに戻ってくる。そのころ、さらには必ず男の子が生まれている」と。主はここで、主には不可能なことはないと明らかにしておられます。そして、そのしるしとして、サラの心の中の思いをも知っているのだということを明らかにしておられるのです。サラは慌てて、「私は笑っていません」と言います。「恐ろしくなった」からだと。この恐れとは、主が目の前にいるという恐れ。自分の心の中を見透かされたという恐れ。そして主の言葉を信じていないということが明確にされてしまうことへの恐れです。いくら親切にお客をもてなそうと、主の御前で主の言葉を信じていないということが明らかになってしまえば、もうどうすることもできません。慌てて、取り繕ってみたところで、どうしようもないです。 15 節「いや、あなたは確かに笑った。」この言葉が語られて、この話は終わっています。弁解するチャンスもないのです。そこで大事なのは、なぜ、主はこのようになさったのか、ということです。

アブラハムも、サラも、神さまを笑いました。「いやいや、無理でしょ」と嘲笑いました。しかし、たとえ笑われても、たとえ馬鹿にされても、神さまは「約束したとおりに」私たちのために働いてくださるのです。私たちが心から信じていなくても、本気になれなくても、「もう無理でしょ」と諦めてしまっても、神さまは私たちのために約束してくださるのです。信じきれない私たち。でも、それでいいと言ってくださっている。大切なのは、私たちが神さまを信じ抜けるかどうかではなく、神さまが私たちを愛し抜いてくださるかどうかだからです。どんなに笑われても、どんなに馬鹿にされても、見捨てずに約束を果たしてくださる神さまです。だから私たちは、ちょっとずつでもいいから、この神さまを信じていきたいのです。冷笑ではなく、本当の笑いになる信仰を、私たちも持ち続けたいと願います。